

“民具”の形態学のために

——伝承の形と機能を読み解く試み——

For the Morphology of “*Mingu*”, the Attempt at Understanding
the Form and Function of the Traditional Tools

神野 善治

KAMINO Yoshiharu

はじめに

神奈川大学国際常民文化研究機構において「民具の名称に関する基礎的研究」というテーマを掲げて5年間の共同研究を行った⁽¹⁾。そのまとめ役を託されて、あらためて「民具」とは何か、そして「モノと名前」の関係について考える機会を得た。「民具」に関心を持ち続けてきた私などは、人類がこれまでに蓄積してきた生活の技や知恵を捉えるときに、「民具」が有力な手がかりを与えてくれることを確信している。それもすでに、80年余り前、渋沢敬三らが、アチック・ミュージアムのメンバーとともに民具研究を始めたころから進展してきた民具研究の蓄積があるからだ。

すでに当時、世の中から忘れられつつあり、見捨てられつつあった身近卑近の生活用具に注目して、これらを「民具」と呼び、研究の対象として収集・保存の活動が始まった。また、全国から、同じ種類とみなされる民具を数多く収集して、比較研究を行い、ときには「足半（あしなか）草履」のようなものまでレントゲン写真をとって構造を究明するなど、「科学的」な探究が試みられた。そして、各地から集まった民具には、同じ種類と思われる民具でも、さまざまな方言の名称で呼ばれていることが注目された。そこで比較研究のためには、民具にも生物学の「学名」に相当するような「標準名」ができないかという願いが生まれてきた。しかし、その後に展開した民具研究の中では、この課題はいわば置き去りにされてきた感がある。多様な民具に多様な方言名称があることが認識され、調査によって形態や呼称の分布状況が明らかになった民具もある。しかし、研究対象とされる特定の分野の民具にも形態や機能に多様なバリエーションがあって、なかなか対象が定まらない。渋沢が「分母」と「分子」の違う小数に例えたように、比較の基準が定まらないのだ。その後、発達したコンピュータにも、民具のデータベースが蓄積されてきた。しかし、互いに知りたい民具を比較しあう適切な検索方法を確立させることが難しかった。それは、いわゆる「標準名」を設定すれば解消できるのではないかという期待があったが、それも難しい作業であることを多くの研究者や博物館関係者が実感している。先般の共同研究は、こうした渋沢以来の悲願ともいえる「標準名」について、あらためて検討することをひとつの課題にして出発したものであった。しかし、この問題に取り組むにあたり、そもそも民具に「標準名」が成り立つことかどうかを問う必要を感じて、「民具の標準名に関する研究」ではなく、「民具の名称に関する基礎的研究」とテーマを設定させていただいた。

1. 民俗学と民具

「民具」とは何か。この辺りで私の立場を示しておく必要があるだろう。私は「民具」を有形の「民俗文化財」の一部と考えるので、まずは「民俗学」と「民俗」の捉え方を示したい。かつて谷川健一氏が、民俗学とは「神と人間と自然」の交渉を究明する学問だと繰り返し述べておられたのに共感を持った⁽²⁾。ただ、神と人間と自然とが相互に関わる世界は、民俗学に限らず他の学問領域でも該当する。そこでこの三者が三つ巴に関わることと、その交渉の中で「世代を越えて伝承され蓄積されてきた知恵と技」を「民俗」と考える。そして「民俗」が具体的なモノの形をとって現われるのが「民具」の世界だと。一般に「道具」とか「器具」と呼ばれるモノの他にも、精神的な活動がカタチになった象徴的造形物の多くも、「民具」の範疇で包括的に捉えられる。この広がり「道具学」や「生活学」と極めて近い関係にありつつ「民具学」と「民具」が、ひと味違う魅力を発揮している部分だと思っている。

「民具」は、人間の身体活動と精神活動の結果として、手や足や身体の延長、あるいは頭の中に蓄積されてきた暮らしの知恵と技が、具体的なカタチのあるモノとして「外化」し、世代を越えて継承されてきたモノと考えると、それは「民俗造形」の世界だと言いかえることもできるだろう。

それゆえ、土中から発掘される考古遺物から、私たちが現代の生活の中で使い続けている多様な造形物まで、このような伝承性（民俗性）が継承されているモノがあって、今後も継承されていくと考えている。田辺悟氏が『民具学の歴史と方法』⁽³⁾で示されているように、「民具」の範囲を設定するのに、あまり条件を厳密にするよりも、①伝統的な素材と、②伝統的な技法で制作され、③伝統的な使い方をされるモノを考え、そのひとつでも要件が満たされていれば「民具」と考えてよいという意見に賛意を表したい。そしてここでいう「伝統的」ということを、私は「世代を越えて共有されてきた」ことと考えている。

一方、「民具の名称に関する基礎的研究」プロジェクトでは、主に農具を担当された河野通明氏は、一般の人々が今では、もう廃棄され忘れられようとしている「過去の遺物」として「民具」を捉えている現状から帰納して、「民具」を「現役を引退して地域社会の歴史や暮らしの語り部となった庶民の道具類」とするのが適当ではないかとされている⁽⁴⁾。このように河野氏は「民具による歴史学」を標榜されて民具を歴史資料として位置づけ、各地に眠ったままになっている民具の情報を数多く「発掘」し、それを読み取って多くの成果を挙げている⁽⁵⁾。

ただ、一般通念としては「民具」がもう過去のもの、「昔の生活用具」と同義と捉えられている傾向があると思えるが、私などは、現代の暮らしの中で生きている道具や器具などさまざまな造形物の中に、「民具」としての要素が広く残存して、その役目が今後も私たちの生活の中で展開する可能性を持ち続けるのではないかと考えている。このことを、民具研究者はもっと一般の人たちにも明示できるのではないだろうか。

2. 民具がおかれた二度目の危機

高度経済成長の時代に、伝統的な生活用具が、日常生活の急激な変化から取り残され、忘れ去られようとしていた。これをなんとか後世に残したいという思いが高まり「民具」の収集活動が盛んに行われて、膨大なコレクションが各地に生まれた。重要有形民俗文化財の制度ができると、民具のコレクションが国の文化財として指定される道が開けた。民具研究講座が開かれ、続いて民具学会が生まれたときに全国から集まった人たちの中にそういう民具のコレクターや新しくできた地域の博物館の学芸員がいて、その動きを推進した。民具の収集場所としては、よく学校の空き教室などが使われたが、指定物件や博物館の収集品は立派な鉄筋コンクリートの収蔵庫に収蔵されるよう

にもなった。ところが、当時の危機感によって一気に収集された民具が、今、ふたたび存亡の危機を迎えている。地方創生がうたわれながら、平成の大合併で市町村がまとまると、ひとつの市内に複数の博物館はいらぬとか、同じ民具がたくさんあれば、整理して処分せよとか、収蔵施設の老朽化などを理由に収蔵の民具が廃棄の対象として検討されていることもある。民俗資料館・郷土博物館が休館、閉館になったという話も聞こえてくる。整理を依頼された民具研究者が、結局は、廃棄対象リストを作らされていたというやりきれない話もある。

なぜ、かつて熱心に行われた収集活動の成果物が、今、存亡の危機を迎えているのか。その理由のひとつは、実体験として民具を理解し、共感を持っていた世代が去り、世代交代がなされたことがある。現物を自ら使い、愛着を持ち、その意味や価値を知っていた世代にとっては、その民具に体現している知恵や技は当たり前のことだったために、それを書き残したり、伝授したりすることなく、モノだけが残されてしまった場合が多かったのではないか。つまり、民具の価値を明確に示し、訴えられるだけの十分な情報と体験が次の世代に伝承されなかった結果がこの現状を招いたといえないだろうか。

民具に関心を持つ私たち研究者には、今こそ、民具の持つ魅力と底力を、確かな情報によって発信する手立てを講じる責務があるのではないか。それには、従来の方法に安住せず、民具が秘めている情報を、効果的に引き出せる方策をもっと開拓していく必要があるのではないだろうか。

地球上では、『生物の多様性』が危機を迎えている。それが失われることが、地球と人類の将来のためにどれほどの損失になるか。日常的には必ずしも現実感がないが、地球上の大型動物の多くは来るべき数十年または数世紀の間に絶滅するという。すでに数千頭、あるいは数百頭になっている種が多い。一方、農耕を始めたころ1,000万人だった人類は、現在の増加率のままだと2050年には120億人に、そして22世紀末には1,000億人になるという。また、科学技術万能の時代に、このまま突き進むと自然が反逆するに違いないと警鐘をならす学者は少なくない⁽⁶⁾。このことと重ねて、私たちは先祖が作り出してきた多様な「民具」が、この時代に一気に失われて、「民具」の中に蓄積されてきた人類の豊かな英知を失う危機にあることに気付かなければならない。それが将来に向けてどれほど大きな損失になるかを、私たちはもっと具体的に現代社会にアピールする役目を果たさなければならぬのではないか。

3. どうしたら民具に隠れている価値を引き出すことができるか。

従来の民具研究でも、個別のテーマ研究には、いくつもの注目すべき成果が挙げられている。また、多くの分野について系統的なコレクションが生まれ、あるいは地域ごとの体系的なコレクションが充実してきている。しかし、それらの民具が示す価値を、一般に分かりやすく伝え、意味のある情報を後世に残す段取りができていないかという点、とても心もとない状況にある。特色のある民具のコレクションが、国の重要有形民俗文化財や、登録文化財となり、県や市町村の文化財指定を受けて保存の措置が講じられている。しかし「活用」方法は模索状態のまま。まだ、研究者が手を付けていない、未開拓な分野もたくさんあり、魅力的な個別テーマが隠れている。これだけインターネットの情報社会が発達したにもかかわらず、少なくとも全国各地で保存されているコレクションの民具から、知りたい情報を引き出して比較研究することは難しい。あいかわらず勘に頼り、時間をかけてコツコツと歩いて見る以外に方法がないのが現状だ。実は、それが新しい課題と情報に行き着く一番よい方法だとも思えるが、あまりに非効率だ。個別のテーマごとに民具研究をもっと進展させ、民具を通して人類の蓄積してきた英知を再発見し、広く表明することができないだろうか。眠っている民具を揺り起こし、現代の暮らしのヒントとし、また将来に残す有効な手立てはないの

だろうか。どうやってこれらのコレクションに向き合えば、有効な道すじを見出すことができるだろうか。広い範囲の比較研究ばかりでなく、一地域、あるいは一家族における民具のあり方を体系的にインテンシブに捉えることも重要だろう。TEM 研究所の眞島俊一氏のグループなどが取り組んで、めざましい成果を出され⁽⁷⁾、私たちも『静岡県史』⁽⁸⁾や東京三鷹市の「水車経営農家」の民具調査でこの種の調査を試みた⁽⁹⁾。近年では韓国で同様の生活財調査が「サリムサリ」と称して国家規模で継続されている⁽¹⁰⁾。一方、各地に蓄積された膨大な民具の情報から共通する民具の情報を引き出して、特定のテーマ研究が推進されることも期待したい。

4. 「名称」は手がかりのひとつにすぎない

民具を見定めていく重要な手立てとして「標準名」の設定が期待されていた。しかし、「言葉と物」の関係を問い続けてきた哲学や、生物学などを中心にした分類学、あるいは認知言語学などでは、人が作り出してきたモノ、すなわち「人工物」には生物学のいうような「種」の概念は設定できず、それに基づく分類はできないと明言している。言語学では「ものという存在」があって「ことば」がつけられるのではなく、「ことばがつけられてものが存在する」と考える、いわゆる「唯名論」の立場が声高に主張された時期がある⁽¹¹⁾。さらに最近では「自然物」の分類でさえ、人間のものの見方が反映していて「科学的」に見ているつもりで危うさが指摘されて⁽¹²⁾、さらに、すべては人間の脳の産物だという「唯脳論」に人気がある⁽¹³⁾。

としたら、民具のような人工物では、その概念の境界を、その形態的特徴から厳密に定義することなどできないのが原則であり、「標準名」や「学名」のようなものも成り立たないことになる。それでは渋沢が夢に見た「科学的な」比較研究など成り立たなくなるだろう。

しかし、これまで多くの民具にふれてきた私たちは、日本全国に広く共通した形態や機能を持つ民具があること、その中には数千年を越えて形態や機能が受け継がれてきたと思えるようなモノがあることさえ知っており、一方で、それぞれの地域ごとに特徴的な民具が見出されることも実感として知っている。

これまでも全国的に共通する民具の概念を示して、比較研究を行って興味深い研究が提示されてきた。ただし、それらの研究が対象とする民具の概念は、どの分野でも形態と機能は微妙にバリエーションを持って広がり、隣接する分野とルーズにつながり、さらに、それらに極めて多様な方言名が与えられて相互に交錯する状況を呈しているのが当たり前の状態にある。このように「分母」も「分子」も定まらないのがむしろ基本的なあり方なのだとすることを前提にする必要がある。

5年間の共同研究を通して、全国の民具コレクションの中でも充実した七つを選んで、それぞれ典型的な民具を抽出し、リストを並べた。そこから共通する研究対象を探索できるように、それなりの「共通名称」をタグとして設定することを試みた。この作業は意義のあるものと思われたが、「名称」「呼称」に頼ることには問題が多く、検索手法としては、ひとつの手がかりにすぎないことを痛感させられた。「モノ」を中心に見ていくには、あらためて、その形態と機能のあり方に注目していくことが必要だということに気付かされたのである。

5. 民具ならではの「存在論」

特定の民具を同一の仲間として定義することの困難さと、同一と思われる民具に多様な名称がつけられ、モノとことばが錯綜する混沌としたあり方こそが、人間とモノとの基本的な関係なのだというのを認めなければならないが、そのうえで、民具のような人工物の場合に、生物学のいうような「種」の捉え方とは別の「存在論」を見出すことができるのではないか。これまで民具研究の

蓄積から帰納法的に探っていくことで、人間が作り出すモノ（人工物）の中でも、「民具」には、人間ならではの「モノ」の作られ方、使われ方が民族や環境に応じて、ある程度まで特定の型として蓄積されているのではないか。それを見出していく手法があるのではないかと思えてきたのだ。

国際フォーラムの基調講演では、前半で私の青年時代における民具との出会いから、その後の民具研究の足跡を紹介した。特に、村境に立てられた巨大な「藁人形」の信仰が、東北日本一帯に多様に展開していることに気付いたこと。それらが個別には多様な呼称で呼ばれていながら、形態と機能に共通性が認められることから、「人形道祖神」という用語を設定してひとつの概念として捉えることを試み、その全体像の把握をある程度まで達成できたという手ごたえを感じた⁽¹⁴⁾。

また、沼津市歴史民俗資料館の学芸員として活動した時期に出会った「筥」のテーマでは、狩野川という比較的小さな河川流域でも多様な「筥」があり、いくつもの呼称があることに関心を持った。静岡県内の他の河川や、埼玉県の荒川流域や山形県の最上川流域などで行われてきた先学の「筥」の研究と比較する機会を得て、全国的にそして世界的に展開するこの民具の多様性を、どう見極めることができるかという大きな課題に遭遇した。ここでも多様な「呼称」のあり方にも魅力を感じたが、それに翻弄されるよりも、個別事例の現場に即して、じっくり観察することで、それぞれの河川の環境との関係から、多様な形態と機能のあり方を見定めることが、この民具の本質を知るうえで、最もたいせつな研究方法であることを自覚するようになった⁽¹⁵⁾。また、「筥」に関する企画展を開催した折、来館されたバスケットリー作家の関島寿子さんから、「筥」を含めた「かご」の類には、空間を構成する「定式」があるという啓示を受けて、民具の形態には、その機能と素材のあり方について見極めていく分析手法があることにも気付かされた⁽¹⁶⁾。

その後、静岡県内の伊場遺跡から出土した古墳時代の「十字形の木製品」が、その形態と構造から漁具の「四手網」の部品として機能を果たし得ることを想像して、各地の民具としての「四手網」を調査したところ「くもで」と呼ばれる十字形の木製部品があることを発見できて、古墳時代の出土品の同定ができたことを発表して、考古学者からは大方の支持が得られたように思った⁽¹⁷⁾。

そのような具体例を重ねて、30年以上も前に、民具全般をあらためて形態と機能から見直す必要を「モノと情報」と題して表明した⁽¹⁸⁾。その後ずっと考え続けても、あいかわらず、試みの段階から飛躍できずにいるが、いくらか光明がさしてくる気配も感じられているので、それを少し示しておきたい。

6. 機能分類の試み ——宮本常一の挑戦——

民具を形態と機能から考えるということで、大きなヒントを与えてくれたのが、宮本常一先生が晩年に提唱した民具の「機能分類」の考え方だった。かつてアチック・ミュージアムが提示した『『民具蒐集調査要目』の項目は分類たり得るかということについて、先生（筆者注／渋沢敬三）は『あれは民具を集める目安だよ、思いつきだよ、分類ではない』と否定されたことがある。」「民具の分類については、民具が意欲的に蒐集されていた昭和一七年頃までずいぶんたびたび話しあった。そして機能による分類が重要ではないかということになって、私は郷里へかえって農具と農耕との関係の調査にしたがったことをさきにのべたが、その結果によってすら、分類論は一つの結論を得るにはいたらなかった⁽¹⁹⁾と述べている。晩年になって、武蔵野美術大学の学生たちとともに民具の研究に集中的に取り組み、いわば「宮本流」の「機能分類」を提示した。

従来、日本の公立博物館などの民俗資料や、重要有形民俗文化財の分類は、文化庁の「民俗資料の調査収集の手引き」に準じている場合が多い。アチック・ミュージアムの「民具蒐集調査要目」の影響も受けて、「衣」「食」「住」から「生産生業」「交通交易」「社会生活」「人の一生」「年中行

事」「信仰」などに分類されて精神的な分野の象徴的民具もカバーしている。暮らしの場面ごとに分けられているため、民具の収蔵や展示でも便利なためか、博物館や民具のコレクションの整理などで広く用いられてきた。しかし、この分類では、用途の分からないものは分類できない。また、材質、形態、機能が近似する民具（たとえば、木箱類、桶樽類や陶磁器類、笊籠類、包丁や鋸などの刃物類など）が、それぞれ使用場面ごとに分散して分類されるため、民具に精通した者でも、素材や形態、機能の特徴で民具を探そうとすると、すべての分野にあたり、収蔵資料の写真をチェックするか、収蔵庫に入って実物をひとつずつ確認しない限り、目的の民具にたどり着けなかった。

そこで期待されたのが、民具をその「機能」で分類しようとした「宮本分類」だった。民具の「機能」を切り口に、たとえば「切截用具」「容器」「煮焼蒸用具」「紡織編用具」「意志伝達用具」など、これまでにないユニークな分類項目を示して私たちを驚かせてくれた。しかし、全体を眺めるとどうも従来のいわゆる「要目」や「手引き」の枠組みを引きずっており、同じ「機能」を持つと思われる民具が、項目間に分散して、分類としての整合性に欠けることに気付いた。そこで「宮本分類」はそのあり方をあらためて検証して、今後の可能性を探ることが求められる。ここでは全体を項目ごとに検討するスペースがないので、基本的な指摘だけしておきたい。

まず、はじめに出てくる「漁猟用具」という項目に注目すると、これは従来の「漁撈用具」と「狩猟用具」のいずれにも共通する「獲物をとるという機能」をひとつにまとめた点がこれまでにない工夫だった。「漁猟用具」では、下位に「射る、撃つ、突く、釣る、仕掛ける、網を張る、すくうという」身体の諸動作を具体的に示して、これらが個別の民具の「機能」を示すということを述べている。弓矢・釣鉤・槍・罨などの個別の「漁猟用具」が持つ様々な「機能」を、「獲物をとる」という「目的・用途・使い道」において抽出して列挙した。おそらく、宮本先生は、「衣」「食」「住」「狩猟用具」「漁労用具」「農耕用具」などの従来の分類にそって、それぞれの暮らしの場面（分野）ごとに用いられている一連の民具を思い浮かべながら、個々の民具にどのような「機能」が託されているかを抽出する作業を行って、それらをどうまとめていけるかを検討したものである。たとえば、従来の「諸職用具」とされた職人たちの工具類に特徴的に見出される「切る」機能に注目して「切截用具」という項目を立てたり、食生活では調理器具に見られる「煮る・焼く・蒸す」といった機能を「煮焼蒸用具」として項目化したりしているのがそれである。このような作業を通して、いわば、民具全体について「機能で」分類することに挑戦したのだろう。

しかし、「宮本分類」では「民具の機能」の抽出作業も、それを束ねる試みも中途半端に終わっている。

ユニークな切り口で「機能」をまとめ得たものと、そうでないものが混在し、「目的・用途」と「機能」の捉え方も渾然としたまま、提示されたのが「宮本分類」だったといわざるを得ない。「宮本分類は失敗だった」と公言してはばからない研究者もいるが、民具を「機能」で見直そうとした意義と可能性とを評価し、その問題点を引き継ぎつつ、もう一步、「機能分類」を徹底させて、新たに民具を読み解く手法を提案していくことが託されたのだと私などは受け取っている⁽¹⁹⁾。

7. 「民具の機能」とは

「民具の機能」とは何かと考え続けてきたが、今では基本的に「対象となるモノの状態を変化させること」と考えるようになった。これは解剖学の機能論から得たヒントによる⁽²⁰⁾。ただ、この世の中のあらゆる物質は、人間の目に見えるか見えないかは別にして、常に、物質的には崩壊の道を進んで変化し続けているのが基本だと考えると、そのようなものに働きかける民具の機能は、対象となるモノの状態の変化を「助長する」か「阻止する」かのいずれかだと見られないか。この視

点から機能全体を基本的に大きく二つに分けると、対象となるモノの状態を「つくり・かえる機能」と、「いれる・ささえる機能」となり、前者は、対象となるモノの状態を「加工・変換する機能」、後者は「維持・支持する機能」と考えることもできる。この両方がひとつの民具の中で働く場合も、あるいは一対、一組、一連の民具で働く場合もある。やや仕組みが複雑になったモノには「器機・機器」と呼ぶべきモノになるだろうが、次第に「民具」とは呼べない「機械」類になる。単純なモノほど多様な機能に対応し、逆に形態が複雑になると比較的単純な機能に特化する傾向があるといえるのではないか。「機能」を軸に考えると、人間が「生きる」上の基本的な行動である「とる」「食べる」「住まう」などの目的を果たすには、それぞれ具体的で多様な「機能」が含まれるので、それを動作で示すと分かりやすい。しかし、モノの名称の場合と同様に、動作も「ことば」では厳密には区別しにくい。あくまで考えるための目安としておくのが適切だろう。

「民具」が働きかける対象には、具体的なモノ（物質や道具・器具）ばかりではなく、エネルギーと情報も含まれる。それらを獲得したり、加工（増減・選別など）したり、保持したり、伝えたりすることを考えると、「民具」あるいは人間が作り出したモノの世界を全体的に捉えることができるように思う。この詳細はまた別の機会に丁寧に検討してみたい。

これまで、私もいくつかのテーマで民具について考察してきたが、製作、使用の現場で実際に観察し、伝承を聞き出すことを重視したい。一方では、先人たちが蓄積してきた膨大な民具コレクションの中からそのテーマごとの民具のあり方を収集することを重ねて、個別テーマごとに、その本質的なあり方を帰納法的に導き出していくことを目指した。このような手法で、人間が生きていくために生み出してきた民具の基本的な機能から「民具の基本的な形態」が浮かびあがってくるのではないか。機能と形態は必ずしも一対一の関係にはならない。しかし、人類が暮らしの中で生み出してきた「モノ」にはある程度まで限られた関係が見えてくるのではないか。それらの読み取り方にたどり着けば、逆に「基本的な形態」から「民具の機能」を推測していく力を私たちは獲得できるのではないかという期待も生まれてきた。これが実現すると、考古学による出土資料や海外の生活用具、民族資料などとの比較研究にも「民具」の研究が貢献できるのではないか。

私が夢に見ているのは、これまでの民具研究で蓄積されてきた膨大なデータから形態や機能で該当する民具の個別事例を呼び出せるシステムだ。モノの世界のあり方を根本から問い直す情報が満載のデータベースになると期待される。経費的には国家レベルのプロジェクトでないと実現しないだろうが、その実現には、モノの形態や機能のあり方を根本から読み解く手立てが開発されている必要がある。まだ、その基礎的なことさえ見出されていないのが現実だろう。本フォーラムの基調講演では、「民具」を形態と機能から読み取るという手法の見通しの一端を示すにとどまった。

30年以上も前に、民具をめぐって「モノと情報」として整理した成果⁽²¹⁾は、単なることばの遊びに終わっていると評した研究者もあったが、その後ずっと考え続けていると、個別の民具を思考の基点にしていくことで、他分野の言語学や心理学、解剖学、デザイン論などで提示されているテーマに重なり、そこで空回りしていると思える議論が、より鮮明に見えてくる体験ができたり、現代的な話題を面白く読み取れることがあったりすることが多く、「民具の形態と機能」を解明していくことが、人間のあり方を考えていく本質的で魅力的な手がかりになると確信するようになってきた。かなり楽観的だと自分でも思うが、他分野の専門家の力も借りながら、膨大な蓄積をふまえた新しい提案がきっと可能になるだろう。

最後に、あまりにささやかな試みだが「補論」として二つの話題を示しておきたい。

したりする、木・紙・金属などの小片。「値段を書いた」「売約済みには赤い」を貼る」「休業の一を下げる」②「おふだ(札)」に同じ。③必要事項を書き記して、何らかの事実の証明とするもの。入場券・鑑札・質札・合札・利札など。④多くの人に告知知らせる事項を書いて掲げるもの。高札・立て札など。⑤カルタ・トランプ・花札などの一枚一枚。「一を配る」⑥(「簡」と書く)日給の簡 ふみ」に同じ。」

「さつ【札】①ふだ。木のふだ。「高札・入札・表札・門札・落札」②書きもの。てがみ。証拠となる文書。「鑑札・書札」③紙幣。「贖札 がんさつ・金札・千円札」④乗り物の券。入場券。「改札・検札・出札」

さらに、岩井宏實監修・工藤員功編『民具の事典』から、文字や絵を記した「札状」の形態の民具を拾い出してみた。カッコ内は、この事典の分類項目である。

(すまう)棟札、(まじわる)鑑札・表札・当番札・高札、(あきなう)質札・引札、(いのる)卒塔婆・千社札・宝船・護符・富籤・おみくじ、(たのしむ)面子・花札、・四竹・びんざさらなど
これらの十数件が該当するように見える。

①「ふだ」の素材・形態と機能

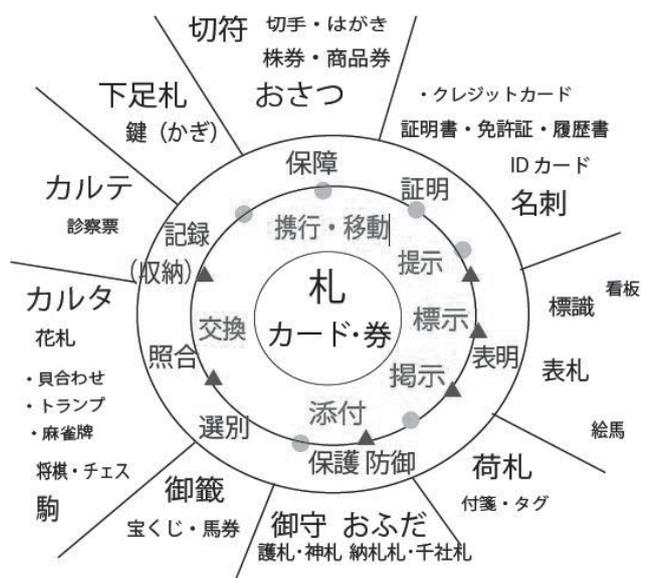
これらの形態は板状で、木・紙・金属などで作られ、中には薄くて柔軟な「紙切れ」や「板切れ」、逆に「高札」「立札」など、比較的大きくて厚手の板もあるが、主には、手のひらに収まるほどで、携帯可能な程度の板状のものを「札」の典型とするのが適当だろう。そして、表面に文字・絵・記号などが印されていたり、色を付けたりすることが、重要な「形態的特徴」なのだ。

主な機能は、「札」の物質的な特徴にかかわらず、そこに記された文字や記号などが、「意味」や「価値」を提示することである。単なる板でありながら、その持ち主のIDや権利(所有権・使用权等)が「証明され」、特定の「価値が保証され」、これを「配る」「交換する」ことで、その「意味」や「価値」の移動も果たされる。

また、同一の「札」がこの世にただ一枚しかないことを保証する工夫がなされていたり、後で合致させる目的で二つに割ったり、照合可能な記号が印されたりして、複数枚あっても、それらが同一のモノ、同じ仲間であることを証明する本物性(真正性)を示す工夫がなされて、交易や交換ができ、もう一方ではゲームとして「遊ぶ」機能もさまざまに展開する。カルタ、花札、めんこ、トランプなどは、「配る・表裏をかえす・示す・合わせる・交換する」など、「札」の物質的な性質を生かした扱いがなされる。

②紙幣と貨幣

カルタやトランプなどのカードゲームの古いかたちに、「貝合わせ」という遊戯具があった。「はまぐり」などの二枚貝が用いられた。生物学の「形態論」で「個別性と普遍性」という重要なテーマ



Yoshiharu Kamino 2016 0201 試作

図2 「札」の機能と形態

があるが、はまぐりの貝は、そのことを如実に物語る。その縞模様はひとつとして同じモノがない。そして、二枚貝を二つに分けたときに、きちんと合わさる貝は、もとの一組しかない。ひとつの貝の両側は唯一無二の関係なのだ。一枚の木札を分断して互いに所有し、札が合わさることで互いを証明する「勘合符」による貿易などが、同様の証明原理を用いていたことが思い出される。

一方で、金貨、銀貨などの「貨幣」も「貨」の漢字が「貝が化けたモノ」とあるようにその歴史が「貝殻」から始まるのが面白い。しかし、この場合は南方系のタカラガイが用いられた。これは巻貝の一種で、内陸部では手に入りにくい貴重品だった。艶があつて美しく、小さくて比較的軽く、丈夫で、穴をあけて紐を通せば、携帯しやすい物理的な形態の特徴もあったことが「貨幣」の機能を果たせたのだろう。中国古代の出土遺物に「貝貨」があることを、それとともにタカラガイを潰したような楕円形の平たい銀貨も出土していることを知った。中央にタテ溝があり、真ん中に穴があく姿からは、背に穴をあけたタカラガイの姿を金属で再現したモノに思えた。「そうか、タカラガイの背に無造作にあけた穴は丸くても、貝のタテ溝のために四角に見えるのだ」と気付かされた。硬貨というものが、貝貨からできたことは定説といえるだろう。そして古い硬貨に四角い穴があくのは、普通は製作工程上の理由からと考えるが、貝貨起源の歴史が形態に遺されたのではないかと、密かに思い続けている。

③「札」の小企画展

「民具」として見られる各種の「札」の世界を思い浮べてみたい。商業の世界では、華やかな「引き札・ビラ」の類が展開し、「下足札や荷札」が日常的に使われてきた。信仰分野では「おふだ」だけでも曼荼羅の世界が描けるほど豊かに展開するが、その周辺には「千社札・おみくじ・絵馬」などの魅力的な「信仰民具」があり、それに現代的なものでは、「券」「籤」「符」と呼ばれる「宝くじ、抽籤券、金券、証券、株券、商品券、切符など」に、「おさつ（お札＝紙幣）」の仲間が加わり、さらに沖縄や中国などの葬送儀礼に使われている「冥界銀行券」などを加えても面白いだろう。現代社会の必需品となった、名刺・プリペイドカードなどに、「票」や「証」の類を加えて、「カード」「カルタ」「カルテ」などの位相を確認しておくことが有益だろう。カードゲームのカルタ「歌留多・加留多」はポルトガル語の *Carta* に由来し、病院ではドイツ語の *Karte* を診察記録帳の名称として採用。さらに絵画や手芸の世界では、厚紙をフランス語でカルトン *Carton* と呼んでいる。導入時期と種類で、分野別に名前を使い分けをしたのであろう。

いわゆる「道具」は、主に物理的機能・力学的な機能が期待されている。「札」の場合も、手のひらに収まる、扱いやすい「板きれ」であるという物質的特徴から、「携帯する、交換する、分配する」などの機能を果たしやすい。そこに文字や記号などが印され、色を付けることなどで象徴的な意味が特別に与えられて、その価値を保障する。これらの象徴的機能が「札」の主要な機能だといえる。

その点は、「おさつ」も「おふだ」も同様で、携帯しやすい板きれだったり、壁に貼り、日々礼拝の対象とするのに適した寸法の紙であったりするのは副次的な物質的特徴であって、主な機能は象徴的機能の方にある。一枚の紙に摺り出された神仏の姿や文字が霊力を発して、信ずる者を守護するなどの機能を持つようになる。物質的には一枚の紙片にすぎなくても、そこに書かれた内容に、絵や文字、署名や印、花押などが伴うことで、特別な意味が生じて、人の一生や、社会のあり方に大きな影響を与えるような力を持つことになるのが「おふだ」の本質だといえるだろう。

これらの「札」という独特の形態と機能を持つモノのあり方を丁寧に見ていくと、社会生活、経済生活という極めて人間的なレベルで「札」が目に見える証拠物として機能してきたことがわかる。

いわば「民具」の域から、次第に逸脱して、人間の暮らしを便利にしつつも、一方で、人間の人生を左右し、縛り付けるものになっていった状況が具体的に見えてくるのではないだろうか。こんなテーマの小展示ができれば面白いだろう。

注

- 1) 神奈川大学国際常民文化研究機構『神奈川大学国際常民文化研究叢書』第6巻「民具の名称に関する基礎的研究（民具名一覧編）」2014年、および、同『神奈川大学国際常民文化研究叢書』第9巻「民具の名称に関する基礎的研究（地域呼称一覧編）」2015年、いずれもインターネットでも公開されている。
- 2) 谷川健一『神・人間・動物—伝承を生きる世界』講談社学術文庫 1986年など
- 3) 田辺 悟『民具学の歴史と方法』慶友社 2014年
- 4) 河野通明「あとがき」『国際常民文化研究機構 叢書』第6巻 2014年
- 5) 河野通明「身体技法・感性・民具の資料化と体系化」第2部、『神奈川大学 21世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書 2008年など
- 6) 日高敏隆編『生物多様性はなぜ大切か?』地球研叢書 昭和堂 2005年
- 7) TEM 研究所による新潟県佐渡小木町（現、佐渡市）などでの諸調査（真島俊一・林道明『南佐渡の漁村と漁業』1975年など）
- 8) 神野善治・外立ますみ「一軒の家を支えた民具の諸相（静岡県水窪町）」『静岡県史別編1（民俗文化史）』付図、静岡県、1995年
- 9) 神野善治編著『水車屋ぐらしを支えた民具—武蔵野（野川流域）の水車経営農家民具調査報告書』三鷹市教育委員会 2005年
- 10) 韓国国立民俗博物館による生活財（サリムサリ）の調査年次報告書が刊行されている。
- 11) 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書 1973年
- 12) 池田清彦『分類という思想』新潮社 1992年
- 13) 養老孟司『唯脳論』青土社 1989年
- 14) 神野善治『人形道祖神—境界神の原像—』白水社 1996年
- 15) 神野善治「筌漁の研究（1）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』6号 1982年、「筌漁の研究（2）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』7号 1983年
- 16) 関島寿子『バスケットリーの定式』住まいの図書館出版局 1988年
- 17) 神野善治「四手網考—伊場遺跡出土の有樋十字形木製品をめぐって—」『物質文化』41号 1983年
- 18) 神野善治「モノと情報—道具の体系論への試み—」『沼津市博物館紀要』11号 1987年
- 19) 宮本常一「民具試論（一）」『澁澤敬三記念 民具論集1』日本常民文化研究所編 1969年→同「民具試論（二）」「同（三）」「民具学の提唱・民具試論（四）」、後に宮本常一『民具学の提唱』未來社 1979年
- 20) 養老孟司『形を読む—生物の形態をめぐって』培風館 1986年
- 21) 18)に同じ。